

## 市長メッセージ

赤十字国際委員会ジュネーブ本部における植樹式の開催に当たり、メッセージをお送りいたします。

私たち広島市民は、68年前の廃墟の中、献身的な活動によって、被爆者に生きる勇気と希望を与えてくださった赤十字国際委員会駐日主席代表のマルセル・ジュノー博士のお姿に深い感謝の気持ちを持ち続けております。現在、広島が、にぎわいあふれる街として復興できたのも、ジュノー博士を始め世界中の方々の支援のおかげであり、改めてお礼申し上げます。また、赤十字の皆様には、核兵器の非人道性を訴え、世界の核兵器廃絶に向けた取組を力強くリードされており、志を同じくする被爆都市の市長として心から敬意を表します。

被爆から68年を迎え、被爆者の高齢化は着実に進んでいます。今、最も重要なことは、被爆者の体験や平和への思いをしっかりと継承し、共有していくことであり、このことが広島市の使命であると認識しています。

私は、今年4月から5月にかけてここジュネーブで開催された核不拡散条約再検討会議の第2回準備委員会のNGOセッション等において、平和市長会議の会長として、核兵器の非人道性と「核兵器禁止条約」の早期実現に向けた取組の必要性を訴え、多くの賛同を得ることができました。また、その際には、赤十字国際委員会のクリスティーヌ・ベアリ副総裁に面会し、被爆の実相を伝える原爆展の開催などで今後一層の連携を図っていくことで意見が一致しました。

また、私が会長を務める平和市長会議には、今や156の国・地域から5,600を超える都市が加盟しており、その人口は世界の総人口の7分の1に当たる10億人に及んでいます。平和市長会議では、その力を結集して2020年までの核兵器廃絶を目指す「2020ビジョン」を世界的に展開しています。

こうした平和市長会議の活動を展開する上で、核兵器廃絶を目指すという目標を共有する赤十字の皆様とも更に連携を強化したいと考えております。そうした意味からも、8月6日に合わせ、広島原爆を生き抜いた樹木の苗を植樹し、核兵器廃絶に向けた国際世論の醸成に向け、平和のメッセージを伝えていく今回の取組は誠に意義深く、深く敬意を表するものです。

存命のうちに核兵器廃絶を見届けたいと心から願う被爆者の平均年齢は78歳を超えました。核兵器という「絶対悪」を取り払う努力が実を結び、一日も早い世界恒久平和が実現することを心から願ってやみません。皆様、人類の明るい未来のため、私たちとともに手を携え、新しいムーブメントを起こそうではありませんか。

終わりに、植樹式の御成功と皆様の今後ますますの御健勝と御多幸をお祈りいたします。

2013年8月6日  
広島市長 松井一實